2021/06/26

まつたけ再生事業プロジェクト

１．目指すところ、想い

温暖化防止対策が全世界的規模で進められている。日本に於いても、2050 年温室効果ガス排出ゼロへの道筋が示された。地球温暖化への対応を、新たな成長の機会と捉え挑戦する。

その一環として、地域の約 90%が山林に囲まれた徳地地域の特性を活かし、特に以前繁栄を極めていた「まつたけ」に光を当てた事業展開を図り、お年寄りを元気にし、地域活性化の起爆剤の役割を果たしたい。

この激変の時代を生きた人間として、古（いにしえ）の里山に戻す責任は等しくある。

２．何故、今、「まつたけ」なのか

徳地地域は、嘗ては「まつたけの宝庫」であった。まつたけに対する想い入れは、特に高齢者に共通して根強い。

高度経済成長期等歴史的変遷を経て、山離れが進み、その影響もあって松枯れも進み、まつたけは今、殆ど壊滅の状況にある。

各地の山は荒れ、活力・元気がない山では、山が本来持っている保水力が無くなり、近年特に、山崩れ、洪水等の災害や山火事等が各地で頻発している。

今、徳地の山々を見渡すと、荒れ果てた山の中で、生き残った元気のよいアカマツがあちこちに散見される。

一方、まつたけが宝庫であった時代を知る人は皆高齢化が進み、荒れ果てた山の中に自ら進んで入るエネルギーが失せかけている。「今さらまつたけは生えてこんじゃろう」と諦めの声が聞こえてくる。

「このようにしてしまった一因はわれわれにもあるのではないだろうか。荒れ果てたままの状態を次代に引き継いで良いのだろうか」。完全に元の状態に戻すことは出来なくても「その道筋」は立てられるのではないか。

まつたけ再生には長い年月がかかるかもしれない。再生できないかもわからない。たとえ再生できなくても、山に元気が戻り後世にきれいな山が引き継がれていけばそれでよい。

世の中 SDG s（持続可能な開発目標）が進んでいる。フォローの風が吹いている。今がマツタケ再生に立ち上がるには絶好のタイミングではないだろうか。最後のチャンス、その可能性に挑戦したい。

３．どのように進めて行くか

（１） まつたけ山の選定

①適齢期のアカマツが育っているところ

②若いアカマツが育っているところ

③昔、まつたけが生えていたところ

④アクセスがよいところ

⑤公有林→個人所有林

（２） 人材の確保

①昔、山を整備し、まつたけを採取したことがある方

②まつたけに興味があり労を厭わない方

③次代に引き継いでくれる若い方

（３） **事前準備**

①山道の整備

②休憩所、トイレ整備

③チェーンソー、のこぎり、鎌等山仕事に必要な備品準備

④まつたけ講師、山作業講師による研修

４．活動スケジュール

◇活動開始～2 か月目

・主に地元でまつたけ再生に積極的に関われる人を探し出す。目標 5 人。

◇2 か月目～5 か月目

・まつたけ山適地の選定

・各種手続き、承諾

◇4 か月目～9 か月目

・山道の整備

・休憩所、トイレ整備

・各種備品調達

◇7 か月目～10 か月目

・まつたけ講師による研修

・山作業講師による研修

◇10 か月～

・活動開始

５．事業・イベント展開

・山菜、野草の加工・販売

・はなしば、サカキの栽培・販売

・なめこ、しめじ、ひらたけ、しいたけ、あけび、むべ等の栽培・販売

・森林ボランティア

・森林ツアー

・動植物生態調査観察

６．どんな運営にするか

・「労働者協同組合」組織として法人化する。

・まつたけ再生の過程で派生して出てくる事業・イベントは、地域資源再生開発研究所の運営資金源と位置付け、幅広く取り組む。

・特に高齢者の居場所になる、くつろげる「場」としたい。

・若い人が安定した形で「生業」として営めるように心がける。

・とにかく、お互いが楽しく、自由で、対等。それでいて相手に敬意を払いながら繋がっている。

以上　　2021.6.11　　（文責：市原　茂）

地域資源再生開発研究所構想
～脱炭素社会の実現に向けて～

１．趣旨

今、温暖化防止対策が全世界的な規模で進められている。日本に於いても 2050 年温室効果ガス排出全体としてゼロへの道筋が示された。今回の計画では、地球温暖化への対応は、新たな成長の機会と捉えられている。

地域資源に恵まれた特に地域の約 90%が山林に囲まれたここ仁徳地域が、この地域資源をフルに活用することによって地域の活性化と脱炭素社会の実現に向け動き出したい。

２．目的

人を含めた地域資源を有効活用し、特に脱炭素社会の実現に向けた各種研究や開発を行い、、新しい産業を生み出し、地域の活性化につなげる。

３．取り組み方

・今あるものをフルに活用し、お金をかけない。
・できる人が、興味のある人が、できる時に、自ら進んで取り組む。
・小さく始めて、動きながら、壁を突き破りながら進める。
・集まってきた人が、語り合うことで派生して出てくるものを種として育てる。
・人が人を呼ぶ、活気のある場とする。
・高齢者の経験を次代に継承する。高齢者が生き甲斐をもって取り組めるものを優先する。
・障害を持った人の雇用の場としたい。
・地域外の方を受け入れ、そのための宿泊所の確保を古民家、空き家の活用に繋げたい。

４．具体的事業

①まつたけ復活・再生事業

・仁徳地域はかつて「まつたけの宝庫」であった。
・昭和 40 年台後半～50 年台にかけて松枯れが大量発生し、まつたけが出なくなった。
・当時の種から育った松が今、4、50 年の時を経て、山中に存在している。行政の力を借り生きた松の実態を調査し、適地を見つけて整地、管理し、まつたけの育成を試す。
・育成が確認できれば徐々に適地を広めていく。

➞地域の特産にし、成長産業に育てる➞雇用を生む➞地域が活性化する。

②粉炭・竹炭の開発、製造事業

・①で出てくる間伐材等を活用。

➞製品を主に土壌改良に使い、炭素固定による脱炭素社会に貢献。

③生活弱者対応事業

・過疎にいる高齢者、生活弱者向けに、ごみ捨て、買い物代行、医療機関への随行等々行う。

➞安心して暮らせる豊かなまちづくりに貢献。

④動植物生態調査観察事業

・大自然に生きる各種動植物の生態調査・研究
・日本学術調査団

➞自然を豊かなまま次世代に引き継ぐ➞自然体験による子どもたちの心身の健康➞自然保護。

⑤使用済み資源再生事業

・古民家の古材を使った商品開発
・使い古した農機具の修理再生再活用

以上　2021.1.31　　（文責：市原）

労働者協同組合　地域資源再生開発研究所　構想

１．地域資源再生開発研究所を「労働者協同組合」組織として法人化する。

労働者協同組合組織：組合員が出資して、全員が運営に参画する「協同労働」組織。雇う、雇われる関係ではなく、全員が経営者であり、従業員である。最少で 3 人の発起人がいれば、行政の許可がなくても届け出だけで発足できる。

２．これによって

・意欲ある高齢者を中心に、「働き甲斐」を感じてもらいながら、ボランティアでなく、協同労働という形で仕事化し、一定の報酬が得られる仕組みに出来る。
・地域の課題解決や地域振興を法人格で行うことが出来る。
・誰かに雇われず、指図もされないので、主体的に働くことができ、自由な発想で仕事を創造することが出来る。
・仲間が競争相手ではなく、ひとりひとりが持っている個性やスキルを存分に発揮でき「とにかく楽しい」が共有できる。

３．運営のイメージ

・組合員はすべて対等、平等であり、上下関係や忖度は全くない。
・代表者は形式的には置くが、取り仕切ることは一切しない。決め事は全て組合員の話し合い、合意で決める。代表者といえども忖度はしない。
・したがってどのように運営するかも、組合員が話し合って決める。
・決めたことは、文書化し、変更等が生じればこれも組合員間の話し合いで決める。
・収支状況は常にオープンにし、報酬も組合員全員の話し合いで決める。
・あらゆる情報は開示し、隠し事は一切ない透明な運営とする。
・代表者 1 名、事務局 1 名は決める。組合員の話し合いによる。

４．組合員になるには

・地域資源再生開発研究所の主旨に賛同され参画を希望される方。
・老若男女は問わない。
・一定額（組合員で決める）の出資をすることに承諾を頂いた方。
・徳地地域に居住している必要はない。
・地域活性化に余力を捧げたい気持ちがある方。
・新しいことに挑戦する気持ちが強い方。
・いつでも入退会できる。退会時には出資金は返却される。

以上　　2021.5.14　　（文責：市原　茂）